

「クリスマス、おめでとう」

2019年12月25日

クリスマス、おめでとうございます。私は1959年のクリスマスに洗礼を受け、今年で62回目のクリスマスを迎えることになる。クリスマスを迎える度に、洗礼を受けた時のことを思い出す。自分を受け入れることができず、また、苦勞して世の中で生きても意味があるとは思えなかった。そのような虚無的な思いの中でも、必死に生きる意味を見出したいとあがいていた。通っていたお寺の住職から、「教会を知っているか」と問われた。住職は、この青年は仏教では救われないので、教会に行くことを勧めたのではないかと思っている。無常という真理に身を委ねて生きるところに、覚者となる道が備えられるという法を繰り返して聞いた。頭では、そこに広い世界があるだろうと思ったが、今を悩み苦しむ「私」から抜け出せず、法は救いとはならなかった。私の生活環境では仏教が主だった。キリスト教については、書物を通して少しばかり知っただけで、教会、牧師、クリスチャンには全く関りがなかった。しかし、教会に行ってみようと思い、初めて教会を訪ね、牧師という人に遭ったのは高校三年生の時だった。その訪問が契機になって、聖書を読み、私の人生は一変した。今改めて、教会を勧めてくれた懐の深い住職に感謝している。

聖書は、天と地を創造された全能の神がおられ、この方の支配の中に世界はあると説く。 そうならば、私の存在は針の先の一点ではあるが、神の支配の下で、どんなに貧しかろうとも私のアイデンティティを確保することができると思った。神を問いながら、生き死ぬ旧約聖書の人物たちを興味津々と読み進めた。そして、新約聖書の主イエスの愛に感動した。主イエスの降誕物語は史実ではないが、降誕物語をプロローグにして、主イエスの生涯に、こんな人がいるのだろうかと思われ、圧倒された。しかし、イエスは人間であって、神として受け入れることはできなかった。牧師に問うと、人間イエスでいい、イエスが何を語り、何をしたかを聖書から聞き取りなさいと言われた。聖書を読みながら、「いまだかつて、神を見た者はいない。父の懐にいる独り子である神、この方が神を示されたのである（ヨハネ1:18）」という言葉信じることに辿り着いた。神は主イエスに現わされ、主イエスを通して神を知るということである。その時、神の存在と主イエスの愛を信じることができれば、生きられる。そして、信じて生きようと思った。虚無から希望への大転換で、聖書から示された生きることの意味と希望を語る牧師になろうと心を決めた。もし、主イエスを知らなければ、荒んだ生き方をしたに違いない。神学校の受験資格は洗礼を受けて一年以上教会生活をした者となっているので、一年の浪人を覚悟し、クリスマスに受洗を決心した。クリスマス礼拝の前夜、牧師に受洗の希望を電話で伝えた。すると、役員会で承認しなければならぬと言われ、クリスマス礼拝後の役員会で、受洗の承認を得て、次週、年の最後の礼拝で洗礼を受けた。洗礼は個人的なことではあるが、教会で責任を分かち合う式であることを知った。その時の写真は喜びに満ちた顔ではなく、緊張し切った顔である。クリスマスを迎える度に、洗礼を受けたあの時の緊張と感動を思い起こす。

このクリスマスが私の生まれ変わりとなり、牧師への道を歩み始めた。この時、五つのパンと二匹の魚で五千人を満腹させた奇跡が私の望みであった。牧師になることは、五つのパンと二匹の魚しか持たない私が五千人を満腹させるような途方もないことである。しかし、それを主イエスに献げれば、祝福されて、牧師として用いられるのではないか。この奇跡に与りたいと歩んできた。失敗や挫折の繰り返しであったが、牧師として召し、立ててくださったことに畏れをもって感謝している。